

## 【解説】

### 問1: 解説

正解: a

#### 解法のポイント

冒頭の「ある人」の台詞を正確に現代語訳できるかが問われている。

- ・「御蔭(おしとみ)のもとまで畑作られ」: 注釈1にある通り、御蔭は建具のこと。つまり「建物のすぐそば」を指す。
- ・「あるまじきことなり」: 当然あってはならない、とんでもないことだ、という強い否定。
- ・「天の下、そしり申すことはべるなり」: 世間の人々が「そしる(=悪口を言う、非難する)」と言っている。

#### 選択肢の検討

- ・a: 正解。文脈・単語の意味ともに忠実である。
- ・b・c: 不適。「讒言(ざんげん)」は「目上の人に告げ口をして陥れること」だが、本文の「そしり」は一般的な非難を指すため、意味が強すぎる。
- ・d・e: 不適。「信じられない」「無神経」という訳は「あるまじき(=あってはならない)」の訳として不正確。また「あきれはてている」も「そしり(非難)」の訳としては弱い。

### 問2: 解説

正解: d

#### 解法のポイント

高基の反論の内容を精査する。ここでは彼の「極端な合理主義・吝嗇(りんしょく=けち)」が表れている。

- ・「あぢきなきこと」: つまらないこと、苦々しいこと。
- ・「何の清らなることか見ゆる」: 反語表現。「何が美しい(立派な)ことがあろうか(いや、全く立派ではない)」と訳す。
- ・「かしこからめ」: 賢明であろう。「かしこし」は「畏れ多い」の他に「賢い・立派だ」という意味がある。
- ・「清らする人こそ……人のために苦しみをいだせ」: 贅沢をする人こそが、民衆に負担(苦しみ)を強いているのだという主張。

### 選択肢の検討

- a・b・e: 不適。いずれも「(正頼の暮らしが)たしかに華麗に見えます」としているが、本文は「何の……か(反語)」なので、「全く立派には見えない」と否定していなければならない。
- c: 不適。前半は良いが、後半の「人々によって苦しめられる(受動)」が誤り。本文は「人に対して苦しみを与える(能動)」である。
- d: 正解。「あぢきなき」を「つまらない」、「何の……か」を否定、さらに後半の因果関係も正しく記述されている。

### 問3: 解説

正解: c

### 解法のポイント

高基が病に伏した過去の経緯を読み解く。

- 「小さくて、病してほとほとしかりける」: 幼い頃、病気で「ほとほとし(＝あやうく、～しそう)」だった。つまり、死にかけたということ。
- 「かかる財の王にて果たさず」: これほどの金持ちでありながら、(親の立てた願を)果たさなかった。
- 「その罪に、恐ろしき病つきて」: その報い(罪)として、今の重病にかかった。

### 選択肢の検討

- a: 不適。「なかなか治らなかった」ではなく、「ほとほとし(死にかけた)」という極限状態を読み取る必要がある。
- b・d: 不適。「親が病気になって」とあるが、本文の主語は高基(小さくて、病して)である。
- e: 不適。「願いは終わりなく続き」という記述は本文にない。「果たさず(＝実行しなかった)」ことが病気の原因である。
- c: 正解。「死にかけた」「お礼(願果たし)をしなかった」というポイントがすべて合致する。

### 問4: 解説

正解: a

### 解法のポイント

高基のセリフにおける「あたらしものを」の解釈が最大のポイントだ。

・「あたらものを」: 基本単語「あたらし(惜し)」の語幹に接尾語がついた形。「もったいないことだ」と訳す。現代語の「新しい」とは全く意味が異なるので注意が必要だ。

・「わがために塵ばかりのわざすな」: 私のために、ちりほどの(わずかな)儀式もするな、という強い拒絶。

・「打撒(うちまき)に米いるべし」: 注釈4にある通り、お祓いには米を撒く必要がある。高基は「その米を種にすればもっと増えるのに、撒いて捨てるのはもったいない」と主張している。

#### 選択肢の検討

・a: 正解。「あたらものを(もったいない)」、「わがために……するな」、「打撒(お祓いの米)」の論理が本文と完全に一致する。

・b・e: 不適。「あたらし」を現代語風に「新しい」と訳している典型的な誤答選択肢だ。

・c: 不適。前半は良いが、高基は「米」「土」「棟の枝」「胡麻」など、お祓いに必要なあらゆる資材を「実益があるから使うな」と列挙している。選択肢cは棟の枝のみに限定しており、全体の論理として不十分だ。

・d: 不適。「あたらものを」を「あてにならない」と訳するのは誤り。また、胡麻の油を売って「資金が出ていく」のではなく「銭が(手元に)出てくる(＝儲かる)」のが本文の内容(多くの銭出で来)だ。

#### 問5: 解説

正解: b

#### 解法のポイント

病床にあってもなお、「将来の利益」を考えて食を断つ高基の異常なまでの吝嗇ぶりを正確に訳しているものを選ぶ。

・「いたづらに」: 重要単語。「無駄に」「むなしく」と訳す。

・「核一つに木一樹なり」: 種一つあれば木が一本育つのに、それを食べてしまうのは損だという理屈だ。

・「今は食はじ」: 打消推量・意志の助動詞「じ」が含まれる。「もう食べまい」という強い意志。

・「いささかなるものまうぼらで」: 打消の接続「で」に注目。「ほんの少しのものも召し上がらないで」となる。

・「日ごろ経ぬ」: 「数日が経過した」。

#### 選択肢の検討

・a・c: 不適。「いたづらに」を「無理をして」と訳すのは誤り。また、「いささかなるものまうぼらで」を「簡単なものを食べる」と訳すのも、打消の「で(～ないで)」を見落としている。

・d・e:不適。「日ごろ」は「数日」を指す単語であり、「長い時間」と訳すのはやや不適切。また、dは「無理をして」の訳がやはり誤り。

#### 問6:解説

正解:d

#### 解法のポイント

高基の「徹底した合理主義(ケチ)」というキャラクターを一貫して追う必要がある。

##### 1.「こののにはあらで」の解釈

前の場面で、高基は「(自分の家の)橘を食うと種が減る。種があれば木が育つのに。もう(自分のは)食べない」と言っている。その直後に「橘が食べたい」と言うのだから、当然「(自分の資産である)この家の橘ではなく(他人の家の橘を)」という論理になる。

##### 2.「なべてなし」の解釈

「なべて」は「一般的・普通」という意味。五月中旬は橘の季節ではないため、「普通はどこにもない」という絶望的な状況を指す。

##### 3.「みそかに」の解釈

副詞で「こっそりと」。三十日(月末)ではない。

#### 選択肢の検討

・d:正解。「自分の家のものではない(=こののにはあらで)」、時期的に「どこにもない(=なべてなし)」、そして「こっそり(=みそかに)」と、すべての要素が完璧に合致する。

・e:不正解。「自分の家にはないだろうが」は、高基の「自分のは種がもったいないから食べない」というケチな一貫性を読み飛ばした訳だ。

#### 問7:解説

正解:e

#### 解法のポイント

子どもの「密告」の内容と、それに対する高基のショックの大きさを正確に読み取る。

・「母を怨じておとどに申す」:子どもが(何かを隠されたか、怒られたかして)母親を恨んで、父親(高基)に告げ口をする場面だ。

・「お母さんはこの家の橘を取りて...と申さむといひつれば、栗、米を包みてなむくれたる」：子どもが「お母さんがこの橘を取ったってパパに言いつけちゃうぞ」と脅したところ、母親（徳町）が口止め料として栗や米をくれた、と言っている。

・「胸つぶらはしき」「ものも覚えたまはず」：高基にとって、将来「木」になるはずの種を持つ橘を勝手に取られたことは、胸が潰れるほどのショックであり、気を失う（正気をなくす）ほどの事件だったのだ。

#### 選択肢の検討

・a・b：不適。子どもが「自分で取ってきた」と言ったのではない。また、高基は感動などしていない。

・c・d：不適。前半は良いが、高基の反応が「感動」となっている点は、彼のキャラクター（ケチ）を無視した誤読だ。

・e：正解。告げ口の内容、口止め料のくだり、そして高基の絶望的なショックまで完璧に訳出されている。

#### 問8：解説

正解：e

#### 解法のポイント

徳町の苦しい「言い訳」と、結末の不思議な一文をどう解釈するか。

・「人聞き悲し」：重要表現。「（他人が聞いたら）きまりが悪い、外聞が悪い」という意味だ。

・「おのれと腹立ちて」：子どもが「自分勝手に（自分から）腹を立てて」、という意味。

・「葉にやあらざりけむ」：直訳は「（橘の）葉であったのだろうか」。高基が橘に異常な執着を持っていたため、その橘の「葉」に不思議な力があって病が治ったのか、という筆者の推測（あるいは皮肉）だ。

#### 選択肢の検討

・a・c：不適。「人聞き悲し」を「つらい」と訳すのは、この文脈では不十分（世間体を気にしている）。

・b：不適。後半の「橘を食べた甲斐」は、高基が食べるのを拒んでいた文脈と矛盾する。

・d：不適。「自分が怒られると思って」という解釈は本文にない。

・e：正解。「外聞が悪い」「自分から腹を立てて」が正確。後半の「願を果たさなかった報い...」は、これまでの「病氣＝罰」という文脈を踏まえた意識として、選択肢の中では最も整合性が高い（※「葉」をどう解釈するかは諸説あるが、消去法でこれが残る）。

## 問9: 解説

正解: c

### 解法のポイント

徳町が去った理由と、その後の高基の困窮(身の回りの世話)を整理する。

- 「高き人につきたれど」: 身分の高い人(高基)の妻になったけれど。
- 「わがほどにあたらむ男」: 自分の身分にふさわしい男。
- 「知らせでとかくせしに馴らひて」: 徳町が高基に(出費を)知らせずにあれこれ(侍たちの世話を)していたことに慣れてしまっている。

### 選択肢の検討

- a・b・e: 不適。困っているのは「侍女(女房)」ではなく、「侍(男性の家来・従者)」だ。「侍の人々」は古文では基本的に男性の近侍を指す。
- c: 正解。徳町の自立心(自分で稼いだもので生活したい)と、彼女が「高基に知らせず」裏で家計を回していた事実、そして彼女がいなくなって困った従者たちが、直接ケチな高基に要求し始めたという流れを正しく捉えている。
- d: 不適。徳町が去った理由は「気持ちを理解してくれる」云々という情緒的なものではなく、経済的・身分的なミスマッチだ。

## 問10: 再解説

正解: a

### 解法のポイント

ここは文法知識と文脈の「合わせ技」が必要な難所だ。

#### 1. 「人のなきも苦しけれ」の主語特定

徳町(妻)がいなくなり、家計や侍たちの世話をする司令塔がいなくなった。高基は感情的に寂しいのではなく、物理的に「(世話をしてくれる)人がいないことが不便で苦しい」と言っている。

#### 2. 「とどむ」の多義性(重要!)

「とどむ」には「そのままにする(留任)」以外に、「停止する・辞めさせる」という意味がある。

#### 3. 「さもいはれたり」という帝の同意

高基が「位を返したい」と言ったのに対し、帝は「もっともだ」と同意している。同意したのなら、大臣の位は「解かれる(停止される)」と考えるのが文脈的に正しい。

## 選択肢の検討

- a: 正解。「使用人がいないと不便(＝人のなきも苦しけれ)」という理由、そして文脈に沿って「位を解かれた(＝とどめられて)」と処理している点が正しい。
- b: 不正解。「大臣の位に留められたまま」は「とどむ」の訳としてはあり得るが、帝の「さもいはれたり(もつともだ)」という同意と論理的に矛盾する。
- d: 不正解。「どなたかの国」という訳が「人国(地方の、ある一国)」の解釈として不自然であり、aの方が「受領(地方官)への転身」という当時の社会実態に即している。

## 【現代語訳】

### 第一段：世間の非難と高基の反論

このような（高基のケチな暮らしぶり）を、ある人が、「御蔀（建具）のすぐそばまで畑を作られ、お住まいに近い対屋でこのようなことをなさっているのは、あってはならないことです。このお蔵を一つ開けて、立派な御殿を造らせなさいませ。『財宝には主も場所を譲る（財産が主人の命を縮める）』と申すそうです。世間の人々も非難しておりますよ」と申し上げる。

（高基は）「つまらないことだ。あの左大将殿が、広い敷地に立派な屋敷を建てて、世の中の風流人どもを集めて、物資を浪費してばかりいるのは、一体何が立派に見えるのか。その財を貯めて、市を開き、商売をすればこそ賢明なことだろう。私はこのような住まいをしているが、民のために苦勞をかけることはない。贅沢をする人こそ、朝廷のためにも妨げとなり、人々に対しても苦しみを与えるのだ」などとおっしゃる。

### 第二段：病と「もったいない」精神

（高基が）幼い頃、病気をして死にそうだった時に、親が盛大な願を（神仏に）立てた。親が亡くなる時に遺言したが、これほどの財産家でありながら（願果たしのお礼を）実行せず、その罪によって恐ろしい病に取り憑かれ、死にそうになっておられる。徳町（市女）が神祭りや祓えをさせようとすると、おっしゃるには、

「ああ、もったいない（あたらものを）。私のために塵ほどのこと（儀式）もするな。祓えをするにしても、打撒（魔除けの米）に米が必要だ。粃のまま種にすれば多くの収穫になるだろうに。修法（加持祈祷）をするには五石も必要だ。祭壇を塗るには土がいる。土が三寸あれば多くの作物が収穫できる。棟（せんだん）の枝一つにも、実がなる数がある。果物として食べるのに良いものだ。胡麻は油を絞って売れば多くの銭になる。そのカスは味噌の代わりにするのがよい。栗、麦、豆、ささげ、これらは皆さまざまに役に立つものだ」と言って、おさせにならない。

### 第三段：橘の事件と病の回復

こうして、横になっておられる間に、召し上がるのは一日に橘一つだけで、湯水も召し上がらない。「無駄に（いたづらに）たくさん橘を食べてしまった。種一つで木一本になり、成長すれば多くの実がなるだろうに。もう食べまい」とおっしゃる。ほんの少しのものも召し上がらずに数日が過ぎた。「（自分の家のものではない）別の橘を一つ食べたい」とおっしゃる。五月中旬の橘、これは普通（なべて）どこにもない。しかし、この邸の庭にはあった。こっそり（みそかに）徳町が取って差し上げる。

大臣（高基）の子は、徳町の子で五歳くらいであった。母を恨んで大臣に申し上げる。『『この（うちの）橘を取って持ってきたと（父上に）言いつけちゃうぞ』と（母に）言ったら、栗や米を包んで（口止め料として）くれたんだよ』と言う。衰弱したお体で、胸が潰れるような（ショックな）ことをお聞きになって、正気を失われる。徳町は「とても外聞が悪い（人聞き悲し）。この子は自分勝手に腹を立てて、あなたが庭の橘を取ることを禁じていたのを、私が破ったと言っているのです』と言う。（橘の）葉（の効能）であったのだろうか、ご病気は回復した。



#### 第四段：徳町の出奔と隠遁への転身

こうして、徳町が思うには、「身分の高い人（高基）に嫁いだけれど、私が商売して得た収益を、私自身をはじめとして皆で食べているのだ（高基に養われているわけではない）。私の身分にふさわしい男を夫にしよう」と思って、逃げ隠れてしまった。徳町がいて、（高基に）知らせずにあれこれ（家来の）世話をしていたことに慣れていた侍たちは、時々（高基に直接）物を要求したので、大臣は「朝廷に仕えているからこそ、（世話をするスタッフである）人がいないのも不便で苦しいのだ。畑を作り、一人二人の下男を使って暮らそう」と言って、位を返上なさり、前例のないことをおっしゃる。「身分不相応な者が高い位に留まるべきではない。山の民らに従えて、田畑を作ろう。この位を返上して、地方の一国を賜りたい」と申し上げる。「それももつともだ」ということで、大臣の位を辞めさせられて（解かれて）、美濃国を賜った。